

令和 7 年度
福島県 大学生と集落の協働による地域活性化事業
大学生の力を活用した集落復興支援事業
喜多方市山都町業務実施報告書

獨協大学地域活性化プロジェクト喜多方市山都町チーム

指導教員 経済学部国際環境経済学科 米山 昌幸

[目次]	ページ
1. はじめに	3
2. 喜多方市山都町の概要	3
2.1. 喜多方市山都町の位置	
2.2. 喜多方市山都町の概観	
2.3. 喜多方市山都町の気候	
3. 喜多方市山都町の現状	6
3.1. 山都町の人口	
3.2. 山都町の暮らしと支援体制	
3.3. 山都町の地域資源	
4. 今年度の活動実績と評価	9
4.1. ミーティングの開催	
4.2. 第1回現地活動(10月18・19日)	
4.2.1. 第42回山都新そばまつり出店の手伝い	
4.2.2. 就農者等へのヒアリング	
4.3. 第2回現地活動(11月22・23日)	
4.3.1. 旧耶麻農業高等学校校舎見学	
4.3.2. 郷土料理の調理・試食：山都保健センター	
4.3.3. 山都町の現状説明：山都保健センター	
4.3.4. 山都町内視察	
4.3.5. 山都温泉保養センター いいででのゆ	
4.3.6. 夕食：福寿草会館	
4.3.7. 資源回収の手伝い	
4.3.8. そば打ち体験・試食：館原会館	
4.3.9. 空き家視察：木曽・広野行政区	
4.4. 「大学生と集落の協働による地域活性化事業」活動報告会	
5. 喜多方市山都町の抱える問題と課題	25
5.1. 実態調査が得られた問題点	
5.2. 取り組むべき課題	
6. 次年度の活動計画案	26
6.1. 山都町×獨協大学 協力合意書(地域活性化ロードマップ)の作成	
6.2. 山都町の小中学校の児童・生徒とまちづくりを考える	
6.3. 山都町の旅動画のアップロード	
6.4. 山都そばを活かしたそば茶ラテの商品開発	
6.5. アスパラの廃棄部分の活用方法の考案	
6.6. 子どもオーナー本屋さんの設置	

6.7. 旧耶麻農業高等学校校舎の視察	
7. おわりに	30

1. はじめに

2025(令和 7)年度、福島県の募集する「大学生の力を活用した集落復興支援地事業」への応募にあたり、全学の学生の中から 8 名の学生が集まった。福島県喜多方市山都町を担当する獨協大学地域活性化プロジェクト山都町チームは、瀧駿介(学生代表：経営学科 1 年)、堀越そらみ(言語文化学科 3 年)、藤川慎樹(フランス語学科 1 年)、市川玲於(経営学科 1 年)、高橋佐季(国際環境経済学科 1 年)、野崎こころ(同 1 年)、渡邊直向(法律学科 1 年)、伊藤壮平(同 1 年)の 4 学部 4 学科の計 8 名のチームである。福島県の出身のメンバーをはじめ、全学部から集まった多彩な視点を持つ 8 名は地域活性化の取り組みに興味関心を持ち、山都町の未来のために最大限力を発揮してくれるメンバーが集結した。

本業務実施報告書では、主に山都町の地域の情報収集と現地調査に基づいて、山都町の抱える課題点や活用資源を見出し、山都町のさらなる発展に向けて活動の方向性を定めたものである。また、この本報告書を作成するにあたりメンバー同士の議論を通して、山都町が地域活性化を進めるうえで導入できる戦略とこの先の展望を、多彩なアイデアのもとに考えている。

最後に、SNS での発信や PR に力を入れていくために、山都町を象徴する「飯豊山」「山都そば伝承館」「一ノ戸橋梁」の 3 つを抽象的に取り入れ、AI を用いて次のロゴを作成した。今後、このロゴを本プロジェクトのシンボルとして用いていき、親しみをもたれる存在となることを願っている。



私たち獨協大学地域活性化プロジェクト山都町チームは、近い将来にこの山都町が福島県をはじめ、東北地方、全国から認知され、多くの人々が足を運んでくれるような魅力的な町になるためのお手伝いができれば幸いである。

2. 喜多方市山都町の概要

2.1. 喜多方市山都町の位置

福島県喜多方市は会津盆地北部、福島県北西部にあるに位置している(図表 1 参照)。会津地方の北方に位置していたことから、古来、北方(きたかた)と呼ばれていた¹。山都町は、

¹ 喜多方市ホームページ「喜多方市勢要覧」(以下の URL)を参照。

図表 2 にある「山都地域」を指す。町の北方には磐梯朝日国立公園の飯豊山(標高 2105m)²を臨む。

図表 1. 福島県喜多方市の位置



[出典]⁴⁷ 都道府県の地図「福島県の地図」(<https://uub.jp/47/fukushima/map.html>)を参照。

図表 2. 喜多方市山都町の位置



[出典]喜多方市ホームページ「第 1 章 喜多方市の概要」(以下の URL)から引用
(<https://www.city.kitakata.fukushima.jp/uploaded/attachment/43015.pdf>)

(<https://www.city.kitakata.fukushima.jp/uploaded/attachment/8978.pdf>)

² 福島、山形、新潟の 3 県にまたがる飯豊連峰の主峰であり、日本百名山のひとつである。喜多方市ホームページ「飯豊山」(<https://www.city.kitakata.fukushima.jp/soshiki/sangyo-y/31407.html>)を参照。

町には磐越西線が通っており、郡山や会津などへのアクセスすることができる。首都圏から山都町へのアクセスは、新幹線利用で、東京(東北新幹線)―郡山(磐越西線)―会津若松(磐越西線)―山都のルートでおおよそ3時間50分～4時間30くらいである。自動車では、東北自動車道―郡山JCT(磐越自動車道)―会津坂下―山都で、3時間30分～4時間30分くらいといったところである。

2.2. 喜多方市山都町の概観

福島県喜多方市山都町は、もともとは福島県耶麻郡山都町であったが、2006年1月4日に「平成の大合併」によって喜多方市、熱塩加納村、塩川町、山都町および高郷村の5つの市町村と合併し、新たな「喜多方市」となり、喜多方市山都町となった³。町の名物としてアスパラガスやお酒などがあるが、中でも最も有名な名物は山都そばである。十割そばを使い、独特の歯ごたえがあることが特徴である。町内にある「飯豊とそばの里センター」には、そばの歴史を伝える「そば伝承館」も構えている⁴。毎年開催される山都新そば祭りはこの町の一大イベントであり、県外からも観光客が訪れる。歴史的な面で見ると、明治時代の自由民権運動家である三浦文次や、社会教育家の蓮沼門三⁵がこの町の生まれである⁶。

2.3. 喜多方市山都町の気候

喜多方市の気候区分は日本海側気候に分類される。近年の夏は最高気温が35℃を超え、冬は最低気温が-10℃を下回るため、年間の寒暖差が非常に大きい。2025(令和7)年7月、8月には最高気温38.4℃を、2月には最低気温-11.7℃を記録した。年平均気温は12.5℃、年降水量は1,490.5mmであった。また、豪雪地帯としても知られており、積雪時には2mを超えることもある。

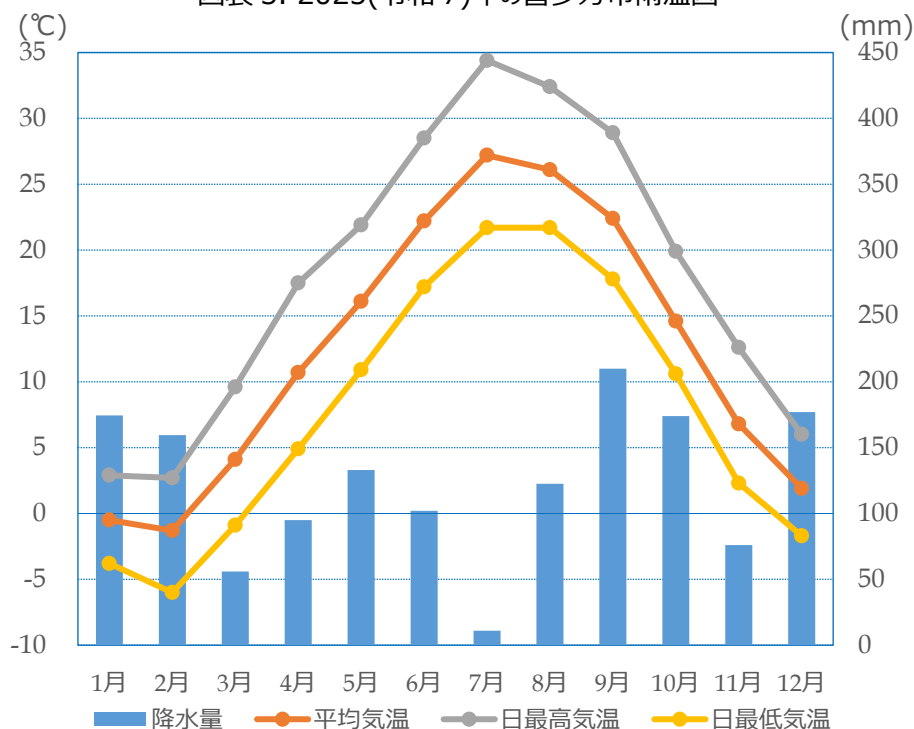
³ 喜多方市ホームページ「喜多方市は平成28年1月4日に合併10周年を迎えました」(<https://www.city.kitakata.fukushima.jp/site/10th/>)を参照。

⁴ 喜多方市ホームページ「飯豊とそばの里センター」(<https://www.city.kitakata.fukushima.jp/soshiki/sangyo-y/32346.html>)を参照。

⁵ 蓮沼門三に関しては、喜多方市ホームページ「社会教育の先駆者 蓮沼門三」(<https://www.city.kitakata.fukushima.jp/site/hasunuma/>)を参照。

⁶ まだ喜多方市と合併する前の山都町役場内山都町観光協会のパンフレット「飯豊とそばの里 山都夢紀行」には、山都人物伝として三浦文次と蓮沼門三が紹介されている。

図表 3. 2025(令和 7)年の喜多方市雨温図



[出典]喜多方市ホームページ「喜多方市気象概況データベース」

(<https://www.city.kitakata.fukushima.jp/uploaded/attachment/53941.pdf>)

3. 喜多方市山都町の現状

3.1. 山都町の人口

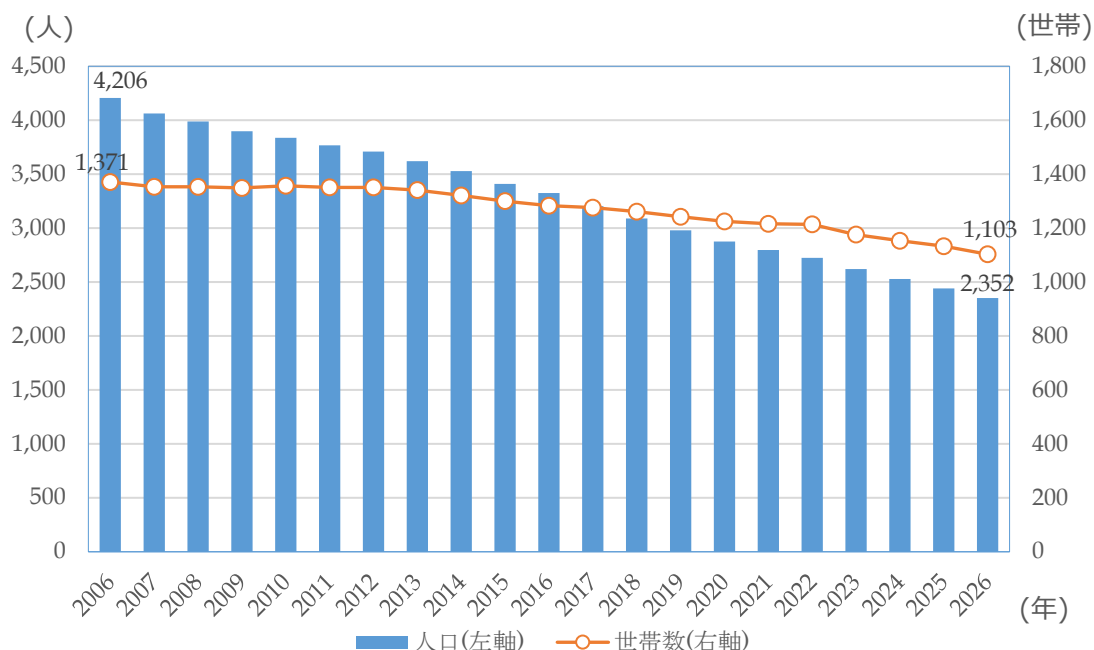
図表 4 は喜多方市のホームページで公開しているデータを使って山都町の人口と世帯数の推移をグラフにしたものである。データは 2006(平成 18)年 1 月時点以降の月次データが公表されているが、最新データは 2026(令和 8)年 1 月までが公表されているので、毎年 1 月のデータを用いた。山都町には、35 の行政区(木曽、広野、館原、三ツ山、松ヶ丘、下川角、寺内、舟岡、小布瀬原、最明寺、一郷、川吉、上林、下村、川隅、洲谷、舟引、堂山、中反、宮古、藤沢、上藤沢、本木、賢谷、沼ノ平、早稲谷、下廻戸、撫木、一ノ木、川入、藤巻、河原田、宮月、堰沢、千咲原)からなっており、これらを集計したものが山都町のデータとなっている。

山都町の人口は毎年少しずつ減少しており、喜多方市と合併した 2006(平成 18)年 1 月時点で 4,206 人だった人口は、2026(令和 8)年 1 月には 2,352 人まで減少した。同じペースで減少しているように見えるが、2006 年から 2012 年までよりも、2013 年からのほうが減少のペースが速くなっている。このペースで進むと 2035 年には 2,000 人を割る勢いで、今後も人口は減り続けると予測される。また、町の高齢者率も高く、高齢者向けのコミュニティ形成も重要視される。

世帯数は 2006(平成 18)年の 1,371 世帯から 2026(令和 8)年の 1,103 世帯まで減少している。

こちらも 2012 年まではほぼ横ばいであったが、2013 年以降減少のペースが上がっている。人口減少のペースよりも緩いペースで世帯数が減っていて、1 世帯当たり人数は 2006 年には 3.07 人であったが、2026 年には 2.13 人まで減少している。

図表 4. 山都町人口と世帯数の推移(2006～2026 年)



(注)2006 年から 2026 年まで毎年 1 月時点の山都町の人口と世帯数を抽出した。住民基本台帳に基づく人口と世帯数で、外国人を含む。

[出典]喜多方市ホームページ「人口データベース」(以下の URL)の「行政区別人口」をダウンロードして山都町のデータを抽出して作成。(最終閲覧日:2026 年 2 月 28 日)

(<https://www.city.kitakata.fukushima.jp/soshiki/kikaku/294.html>)

3.2. 山都町の暮らしと支援体制

ここでは、山都町を訪れてヒアリングや資料からみた山都町の暮らしと支援体制についてまとめてみた。山都町では、町民同士が交流できる機会を多く設けている。例えば、e-sports 交流会では、高齢者が集まり心躍るひと時を過ごしている。この e-sports 交流会はビデオゲームを用いているため、大人だけでなく子供も一緒に楽しむことができるため、町内では人気の催しとなっている。また、昔の写真を町民で持ち寄って鑑賞するイベントも人気で、当時の出来事や思い出を懐かしむことができる。

学校・教育の面では、山都まちづくり協議会が 2022(令和 4)年に行ったアンケートによると、少子化によって子供の遊び相手が減少していることや、学習面での競争が少ないことに問題を感じている町民が多かった。そのうえ、現在おかれている環境から、進路や進学に関する不安を感じる人もいた。

また、山都町は県内有数の豪雪地帯であり、冬は雪かきや雪おろしといった除雪作業を行っている。

山都町の人々の主な買い物先は、「山都ショッピングセンター」というスーパーマーケットであり、町にはコンビニエンスストアがないため、町民の多くの人がこのスーパーマーケットを利用している。一方で、山都まちづくり協議会が 2022(令和 4)年に行ったアンケートでは、生活の中で困っていることや不安に感じていることについて、医療機関やコンビニ・商店の少なさが上位 5 件に入っていた。

町民の移動の方法としては、自動車や自転車、徒歩が主である。鉄道では磐越西線が通っており、郡山や会津方面などへのアクセスが可能であるが、本数が少ないためどうしても自動車移動が多くなっている。

喜多方市では、多種多様な補助金を打ち出しており、「移住支援補助金」や「移住希望者お試し滞在支援事業補助金」など、喜多方市への移住を検討する人をターゲットとした補助金や、「山都そば&観光物産まつり事業補助金」のような、山都そば専用の補助金も設けている⁷。

3.3. 山都町の地域資源

図表 5 は、私たちが現地活動で印象的であった山都町の地域資源を 3 つだけ掲載した。あまりにもそばの印象が強くて、その他の地域資源をしっかりと発掘できなかったのが、次年度はもっと地域資源をしっかりと把握していきたい。

図表 5. 山都町の地域資源の一例

名称	概要	写真
山都そば	すでに福島県内で絶対的な知名度を獲得している。十割そばを用い、独特の歯ごたえがあることが特徴。ふるさと納税の返礼品にもなっており、また、山都新そば祭りは県外からも観光客が訪れる一大イベントとなっている。	
一ノ戸橋梁	鉄橋の名所であり、SL 磐越物語号の通過地点でもあるため、鉄道ファンからの人気を誇る名所。JR 磐越西線の喜多方駅ー山都駅間にある橋梁で、明治 43 年に架橋された当時は東洋一の石造りの鉄橋で、現在、鉄橋を列車が通過する音は「うつくしまの音 30 景一覽」の 1 つに選定されている。年に数回ライトアップが行われ、幻想的な風景を楽しむこ	

⁷ 喜多方市ホームページ(財政課)「補助金の適正化に取り組んでいます」(<https://www.city.kitakata.fukushima.jp/soshiki/zaisei/23649.html>)にある「令和 6 年度補助金交付実績一覧」(<https://www.city.kitakata.fukushima.jp/uploaded/attachment/52528.pdf>)を参照。

	とができる ⁸ 。	
アスパラガス	山都町のアスパラガス産業は、会津トップの収入を誇っている。このアスパラガスは、京都の料亭にも提供している。	

[出典] 一ノ戸橋梁の写真は Photo AC(<https://www.photo-ac.com/main/detail/32414138&title=%E4%B8%80%E3%83%8E%E6%88%B8%E6%A9%8B%E6%A2%81>)よりダウンロードして使用。アスパラガスの写真は株式会社ファーム・山口のホームページ(<https://www.farm-yamaguchi.com/>)にある Instagram の写真を引用。山都そばの写真はメンバーが撮影。以下、とくに記載にないものはメンバーが撮影したものである。

4. 今年度の活動実績と評価

4.1. ミーティングの開催

図表 6 の通り、今年度は 8 回のミーティングを行った。学生同士で行ったミーティングが多かったが、山都町の方々とのミーティングの機会は少なかったと思う。来年度は Zoom を活用し、集落の方々と意見を交換する機会を大幅に増やしたいと考えている。また、学生同士でも、現地活動に行く前の事前調査をしっかりとって情報を持ったうえで現地活動で現地の方々のお話を伺えるように準備したり、山都町のために何ができるのか、より議論を深める機会を増やした方が良いと考えている。

図表 6.2025 年度ミーティング内容

開催日	開催場所	ミーティング内容	参加者
2025/6/26	Zoom	オンラインマッチング会に参加し、受け入れ集落とのマッチングを行った。	学生：2 人
2025/7/16	学内	山都町チームが発足し、学生メンバーの顔合わせを行った。	学生：7 人
2025/7/17	Zoom	集落の方から山都町についての簡単な説明を受け、今年度の活動方針を共有した。	現地の方：4 人 学生：3 人
2025/10/15	学内	第 1 回現地活動に向け、学生で事前ミーティングを行った。	学生：6 人
2025/10/24	学内	第 1 回現地活動の振り返りを学生で行った。	学生：6 人
2025/11/21	学内	第 2 回現地活動に向け、学生で事前ミーティングを行った。	学生：6 人
2025/11/28	学内	第 2 回現地活動の振り返りを学生で行った。	学生：8 人
2026/2/6	Zoom	活動報告会に向け、学生で事前ミーティングを行った。	学生：3 人

⁸ 喜多方市ホームページ「一の戸橋梁」

(<https://www.city.kitakata.fukushima.jp/soshiki/sangyo-y/31956.html>)を参照。

4.2. 第1回現地活動(10月18・19日)

今年度は2回にわたり現地活動を実施した。1回目の10月18日(土)・19日(日)の現地活動には4名の学生が参加して、図表7の行程表のとおり実施した。2日間にわたって開催された第42回山都新そばまつり出店の手伝いが中心であったが、夕食は地元の方がつくった食材を提供いただき、バーベキューをしていただいて、山都まちづくり協議会会員の方々と交流することができた。2日目には3軒の就農者等にヒアリングする機会を作っていたいた。

図表7. 第1回現地活動の行程表

時程	行程
10月18日(土) 8:05～ 8:56	JR 東北新幹線 やまびこ 125 号(仙台行) 大宮発～郡山着
9:15～10:13	JR 磐越西線快速(会津若松行) 郡山発～磐梯町着
10:15～10:45	磐梯町駅から高橋さんにワゴン車で山都町みちくさ通りまで送迎していただく。
10:45～16:00	第42回山都新そばまつり出店の手伝い、昼食、ヒアリング
16:00～16:30	片付け
16:30～17:30	いいでのゆ(入浴料 500 円)
18:00～20:00	バーベキュー(山都まちづくり協議会会員との交流会): 福寿草会館隣
18:30～20:00	翌日に向けたミーティング
20:00～20:30	片付け
20:30～	就寝: 福寿草会館使用料 5,000 円、貸布団 1 組当たり 2,500 円×5 人=12,500 円(いいで斎苑)、計 17,500 円
10 月 19 日(日) 6:00	起床
7:00～8:00	朝食(自炊)
8:30～	出発
9:00～11:15	就農者等へのヒアリング
9:00～ 9:45	齋藤畜産 齋藤忠義氏(最明寺)
9:45～10:30	鍼灸師 芳賀智之氏、中嶋麻弥氏(小布瀬原)
10:30～11:15	株式会社ファーム・山口 山口比佐男氏(千咲原)
11:15～15:00	第42回山都新そばまつり出店の手伝い、昼食、ヒアリング
15:45～16:15	高橋さんに山都町からワゴン車で磐梯町まで送っていただく。
16:37～17:36	JR 磐越西線快速(郡山行) 磐梯町発～郡山着
18:06～19:03	JR 東北新幹線 やまびこ 152 号(東京行) 郡山発～大宮着

4.2.1. 第42回山都新そばまつり出店の手伝い

みちくさ通りで開催された「第42回山都新そばまつり」にて、お手伝いをした。10月18日(土)・19日(日)の2日間、開催されたそばまつりでは、各団体がみちくさ通りにテントで出店し、テントで茹でたてのそばを提供していた(写真1、2)。来場者が多く、店舗ごとに長蛇の列ができた(写真3)。その最後尾にプラカードを持って立ち、各店舗の列の最後尾を来場者に示して、並んでもらうという手伝いをした(写真4)。また、そば伝承館のテントの中でそばを来場者に販売したメンバーもいた(写真5、6)。手伝いをしたメンバーには、もりそば・かけそば各1杯700円チケット2枚をいただいて食べ比べをした(写真7、8)。

そばまつりは42年の歴史があるという。会津ナンバーの車で来場されていた方が多かったが、他県からも観光客が訪れていた。今回のそばまつりには地酒の販売も行っていたが、これは初めての試みで、成功をしているように思えた。以前はサンバも行われていたそうである。どの店舗も皆、自身のそばには自信を持っているが、それらをどのようにPRしていくのが課題だという。そのために酒やキッチンカーを追加で出店し盛り上げているということであった。

写真1. そばを茹でる様子



写真2. そばを盛り付ける様子



写真 3. 大勢の来場者で賑わうそばまつり



写真 4. 長蛇の列ができる店舗の最後尾に立つお手伝い



写真 5. そば伝承館のテント



写真 6. そば伝承館の販売のお手伝い



写真 7. 冷たいもりそば



写真 8. 温かいかけそばと天ぷら



4.2.2. 就農者等へのヒアリング

NPO 法人福島県有機農業ネットワーク理事長の浅見彰宏氏と学生4名と以下の3軒にヒアリングに伺った。

齋藤忠義氏(畜産)

9年前に父母から譲り受けて、規模を拡大し乳牛(ホルスタイン)30頭を飼育(写真9)している齋藤忠義氏(最明寺)を訪ね、ヒアリングさせていただいた。伺った内容は以下の通りである。

- ・酪農家は会津では20軒、喜多方では10軒もなくなってしまった。
- ・毎日6時と18時に搾乳し、タンクに貯めてらくおう牛乳に出荷している(写真10)。自分たちで搾乳できない時には、郡山の酪農ヘルパーを頼んで、搾乳に来てもらっている。
- ・産後50～80日間後(60日後)に発情周期21日間の間に種付けする。受胎後280日間妊娠し、出産するので、ほぼ年1回出産させる。これを30頭で回している。10歳くらいまで出産できるが、乳量が徐々に下がってくるため平均3回くらい出産させる。産後10か月間搾乳できるが、ホルスタイン乳房炎にかからないように乾乳期を設ける。
- ・稲作も14haやっており、コシヒカリを8ha、その他は飼料としての稲作している(写真12)。円安もあって、海外からの輸入飼料が高くなっており、経営を圧迫させている。

写真9. 30頭のホルスタインのいる牛舎



写真10. 搾乳した牛乳を入れておくタンク



写真 11. 齋藤氏にヒアリングするメンバー



写真 12. 稲作により収穫した稲わらの飼料



芳賀智之氏(鍼灸師)、中嶋麻弥氏

2020 年夏に山都町に移住した芳賀智之氏、中嶋麻弥氏(小布瀬原)を訪問し、ヒアリングさせていただいた(写真 13)。伺ったお話は以下の通りである。

- ・ 芳賀氏は鍼灸医、往診している。
- ・ 中嶋氏はエステサロンを経営していたが辞めて移住した。
- ・ 裏山は自由にしてよいと言われており、よく林に分け入って、林を整備している。
- ・ 裏山の檜の林を案内してくれたが(写真 14)、熊はあまり心配していない。林ではコシアブラというタラの芽に近い山菜が採れる。

お二人はすっかり山都町の生活に馴染んでおり、地元の方のように山の中に溶け込んでいた。

写真 13. お話を伺った中嶋氏・芳賀氏



写真 14. 裏山の檜の林



写真 19. ヒアリングメンバーと集合写真



山口比佐男氏(株式会社ファーム・山口取締役)

会津 No.1 のアスパラ農家で 2011 年に会社化した株式会社ファーム・山口の取締役、山口比佐男氏(千咲原)を訪ね、ヒアリングさせていただいた(写真 20、21)。伺った話は以下のとおりである。

- ・阿賀川の北側は旧山都地区、南側は三津合地区。千咲原は三津合地区の 4 つの集落の 1 つ (あと 3 つは大門・上三津合・下三津合)。
- ・1943(昭和 18)年に集団疎開で 50 軒が移住したが、現在は 38 軒にまで減った。
- ・地区には米とアスパラ(6、7 軒)があり、1 億円以上の収入がある。アスパラは 3 町歩 3 万 m²。
- ・昭和 50 年代にグリーンアスパラに切り替えた。2011 年に会社化した。会社化したことで業者が直接買い付けに来るようになった。
- ・震災の影響で風評被害が 6 年くらい続いた。2 年前に息子さんに経営を譲った。地区には 250 棟のハウスがあるが、山口さんのものがそのうち 70 棟。露地を 1 町歩やっている。パートを 6 人使用。95%を京浜に、5%を福島市、郡山市に出荷。
- ・アスパラは植えてから収穫できるまで 2〜3 年かかる。1kg 当たり 2,000 円になる(7、8 年前の 2.5 倍)。4 月〜ハウス、5、6 月〜露地、7 月〜10/15 ハウス出荷。10 のうち 5 品種を生産。11 月下旬頃までの養分転流期には、養分が貯蔵根に送られて太くなる。この時期には窒素 70kg を半分。積算 700℃になると芽を出す。
- ・1 回植えると、30 年収穫できる。アスパラは 5 反くらいできる(キュウリは 1 反)。
- ・温暖化の影響で病気になって、収量が減っている。
- ・収入が 8 割に減った時には、共済の収入保険制度がある。
- ・近くにクマが出没したため、家の敷地の周りには電気柵を設けている。

写真 20. アスパラの栽培方法を聞くメンバー



写真 21. 山口氏



写真 22. ヒアリングメンバーと集合写真



4.3. 第 2 回現地活動(11 月 22・23 日)

1 回目の 11 月 22 日(土)・23 日(日)の現地活動には 8 名の学生が参加して、図表 8 の行程表のとおり実施した。

図表 8. 第 2 回現地活動の行程表

時程	行程
11月22日(土)	
8:05～ 8:56	JR東北新幹線 やまびこ125号(仙台行) 大宮発～郡山着 JR磐越西線快速(会津若松行)

9:15～10:13	郡山発～磐梯町着
10:15～11:00	磐梯町駅から高橋さんに送迎していただく。旧耶麻農業高等学校校舎(福島県会津農林高等学校耶麻校舎)を車内から確認
11:00～14:00	郷土料理の調理・試食：山都保健センター 郷土料理の成立ち(喜多方市食生活改善推進員 宮城悠子さん)
14:00～16:00	山都町の現状説明(高齢化率等)、旧耶麻農業高等学校利活用説明：山都保健センター
16:00～17:00	山都町内視察
17:00～18:00	いいでのゆ(入浴料500円)
18:00～20:00	夕食(自炊): 福寿草会館
11月23日(日)	
6:00	起床
7:00～ 8:00	朝食(自炊)
8:00～	高橋さんに送迎していただく。
8:30～	資源物回収
11:00～14:00	そば打ち体験・試食：舘原会館 舘原行政区との懇談
14:00～15:45	空き家視察(車中からの確認)：木曾・広野行政区
15:45～16:30	高橋さんに山都町からワゴン車で磐梯町まで送っていただく。 JR磐越西線快速(郡山行)
16:37～17:36	磐梯町発～郡山着 JR東北新幹線 やまびこ152号(東京行)
18:06～19:03	郡山発～大宮着

4.3.1. 旧耶麻農業高等学校校舎見学

11月22日(土)10時過ぎに、JR磐梯町駅に到着し、高橋さんと合流した。山都町センターへ向かいながら、車中から旧福島県立耶麻農業高等学校の校舎を見学した。耶麻農業高等学校は2023年4月に福島県立会津農林高等学校と統合され、校舎は会津農林高等学校耶麻校舎として使われていたが、2025年3月末をもって正式に閉校した。

当初は車から降りて、徒歩で視察を行う予定であったが、熊が頻繁に出没していた時期だったため、徒歩での散策は危険と判断し、車内から視察を行った。

高橋さんからは、各地域で子供が減っているため、通学バスを使って1つの学校に生徒をまとめようと考えている、どのようなカリキュラムがいいか私たちに学生目線で考えてほしいということであった。元は農業高校であったということから設備も充実しているそうで、実際に視察してもその校庭の大きさや建物の立派さは印象的であった。

4.3.2. 郷土料理の調理・試食：山都保健センター

旧耶麻農業高等学校校舎視察後、山都保健センターへ向かった。センターには地元の方々が材料を用意して待っていてくださり、喜多方市食生活改善推進員の宮城悠子氏に郷土料

理の調理・試食をご指導いただいた。山都町の郷土料理である「こづゆ」、「笹巻」の調理法を教わった。

こづゆは平坦地方を中心として、冠婚葬祭や祝いに作られる献立である(写真 23)。材料は、里芋、人参、細筍、干しいたけ、貝柱、糸こんにゃく、ぎんなんなど(地域により材料は若干変わる)山や里の幸と、海の幸とを取り合わせた実だくさんのものをうす味にした膳料理である。こづゆは、古く武家屋敷から地域に広まったと言われているが、祖母から母へ、母から子へと受け継がれてきた伝統の味であり、身欠きにしんの山椒漬けや、ぼうたら煮などと共に、材料の組合せや味つけに工夫されていることに大きな特徴があり、郷土料理として代表的な存在でもある。使用した材料とレシピは図表 9 の通りである。

写真 23. こづゆ



図表 9. こづゆの材料とレシピ

材料(1 人分)	分量		レシピ
千貝柱	2 g	1	貝柱は軽く洗って、だし汁の中に入れて戻し、身を細かくほぐす。
黒きくらげ(乾)	0.3g	2	きくらげ、豆麩は、水に浸して戻す。きくらげは石づきを取り、大きいものはちぎる。干しいたけはぬるま湯で戻し、薄いせん切りにする。豆麩は絞って水気を切る。
干しいたけ	1/4 枚	3	絹さやは茹でて、ななめ細切りにする。
豆麩	1g	4	里芋はひと口大に切ってさっとゆがく。人参はいちょう切りにする。糸こんにゃくは茹でて 3cm 長さに切る。
糸田筍	8g	6	鍋に貝柱、里芋、人参、細筍、だし汁を加えて煮、沸騰してきたら、きくらげ、糸こんにゃく、調味料を加えて、材料が柔らかくなるまで煮る。豆麩を加えてひと煮たちさせる。
里芋	40g	7	碗に盛り、絹さやをちらす。
人参	10g		
糸こんにゃく	10g		
かつおだし汁 (貝柱の戻し汁も含む)	80cc		
絹さや	1 枚		
しょうゆ	4g		
酒	3cc		
塩	0.2g		

笹巻は、もち米をい草または笹の葉で包み、蒸し上げた郷土料理である(写真 24)。福島県だけでなく、山形県や秋田県でも親しまれており、保存食として重宝されてきた。包み方は

非常に複雑で、中の米が外にこぼれないよう工夫されている。食べ方としては、笹の葉をほどこいてそのまま食べたり、ごま塩をかけたりするのが一般的であるが、今回はきなこをかけて食べる方法も教えていただいた。どの食べ方も非常においしく、余った笹巻はその日の夕食として持ち帰らせていただいた。使用した材料とレシピは図表 10 の通りである。

写真 24. 笹巻き



図表 10. 笹巻の材料とレシピ

材料(35 個分)	分量		レシピ
もち米	5 カップ	1	笹の葉を両手で持ち、右手に持った側が内側になるように丸め、円すい形を作る。 ※右中指で 5mm 位折り曲げながら形作ると米がこぼれない。
笹の葉	70 枚	2	丸めた笹の中に、前日に浸漬した米を、大さじ 2 杯入れる。
すげ(い草) 長さ 80 cm	35 本	3	米を入れた部分に笹の葉先と葉元をかぶせてふたをする。
<div>【茹で方】</div> <div>①大きめの鍋に湯を沸かし、20～30 分間落としぶたをして茹でる。</div> <div>②茹で上がったら、風通しのよいところに下げて水気を切る。</div> <div>【食べ方】</div> <div>きな粉 50g、砂糖 50g、塩 1.5g をつけて食べると美味しく召し上がれます。</div>		4	ふたをした部分にもう 1 枚の笹を 2 つ折りになるようにかぶせる。
		5	重ねた右の部分を下からまわして包む。
		6	左の部分も同様に包み、三角形にする。
		7	笹巻きの中心を押さえながら、すげの先 10cm ぐらいの位置を左親指で押さえる。(赤テープを貼った角が左側になる)
		8	右手にすげを持ち、右角の裏から表へすげをまわしかける。
		9	手前の角を左側から裏をとおして表にまわしかける。
		10	残った左角の裏ら裏をとおして表にとおして中心にもってくる。
		11	10cm 残したすげを使って片結びにする。
		12	片結びしたすげの余分な部分は切り、1 本は長いままにする。
		13	笹巻きの裏面ですげが掛った形。
		14	出来上がった笹巻きは 5 個ずつまとめ片結びにする。

食事後には、メンバー全員で感想を述べ合った。多くの人が、こづゆや笹巻のおいしさについて言及していた。こづゆは、私たちが日頃食べている料理と比べるとやや薄味であったが、多様な食材が使用されているため味に深みがあり、満足感も高かった。これらの体験を通して、私たちは日頃から健康に配慮した味付けを心がけていきたいと感じた。また、調理を通して地域の方々と交流することができ、非常に穏やかで充実した時間となった。

4.3.3. 山都町の現状説明：山都保健センター

郷土料理試食後、片付けをし、2時間ほど山都町まちづくり協議会の皆様から山都町について説明を受けた。山都町という名前は「山の戸」が由来である。後に、町が発展していき、栄えている場所になったため、戸が都という漢字になったという。2006(平成18)年に喜多方市と合併した。

有名な山として、修験道の山として、人々の信仰の山として古くから崇められてきた飯豊山^{いいでさん}(標高2,105m)と呼ばれる山形県、新潟県からも一望できる山が存在する。13歳になるとその山の頂上を目指して子供たちが登山をするという通過儀礼が受け継がれてきている。飯豊山神社の奥宮は飯豊山の主峰である南峰(標高約2,105m)付近にある⁹。過去には新潟県と飯豊山をめぐる裁判になり、幅90mの登山口の1つの道は山都町のものになった。

河川については兄見川と阿賀川という川が流れている。昔は魚や重量のあるものなど、様々なものを新潟から運んでいた。新潟の文化もそこから広まった。川の近くには漁獲したにしんを保管する蔵があった。時代とともに水力発電のためのダムが建設されたり、東北新幹線が開通したりした。

また、文化的な側面では、明治時代に「喜多方美術クラブ」というものが存在し、文化人を各地から呼び寄せ、育成していたという。

山都まちづくり協議会についてもお話を伺うことができた。山都まちづくり協議会は個人や家庭では解決しがたい地域内の諸課題に対応するために、2023(令和5)年3月に設立された協議会であり、会長は小澤清一氏が務める。協議会は地域づくり部会、健康福祉部会、学習部会の3部会で構成されており、スローガンは「多くの人が交わるまち」「すべての人が生き生きするまち」「世代間のつながりが強固なまち」「子どもたちがふるさとを知り、誇りを持てるまち」の3つを掲げている。

協議会は2022(令和4)年に実施した全住民を対象とした住民アンケートを行った。結果からは以下のことが明らかになった。

- ・60歳以上が7割以上を占め、その2割が1人暮らしである。
- ・山都町に住み続けたい人と答えた人の割合は6割強であった。

⁹ ふくしま観光情報サイト「ふくしまの旅」には、飯豊山神社について「飯豊山神社は喜多方側の登り口である一ノ木(麓宮)と頂上(奥宮)に所在」と紹介されている(<https://www.tif.ne.jp/jp/entry/article.html?spot=1852>)。

・女性・若者に意思決定を任せていくべきかという問いに賛成したのは6割であった。

この結果について、まちづくり協議会は「もっと高くてもいいのでは」と考えている。またさらに顕著であったのは、山都町の高齢化率は52パーセントであるということである。また、地域活動については意欲はあるが参加していないという現状が見受けられた。近隣住民と交流を深められるという反面、時間的、身体的負担が理由で、参加意欲が低下しているという事実がその課題として挙げられた。

4.3.4. 山都町内視察

山都保健センターから山都温泉保養センター「いいでのゆ」まで向かう過程で、山都町の視察を行った。当初は徒歩での視察を予定していたが、熊の出没が多く外に出るのが危険な状況であったため、車内からの視察に変更した。空き家が多く1回目のそば祭りで見えた光景とのギャップを感じた。駅の近くのメインストリートでさえ、10軒以上の空き家があった。今後、空き家をどう利用していくかということが課題であると強く感じた。また、バスやタクシー、電車などの公共移動手段がなく、町民の移動が車に依存しているということも印象的であった。高齢化が進んでいる現状において、今後車の運転ができなくなった高齢者たちに対してどのように対応していくのかという所が重要になってくると感じた。途中で、生活用品を売るトラックを見かけたが、そのような対策が現在とられていることがわかった。

4.3.5. 山都温泉保養センター いいでのゆ

天然温泉「いいでのゆ」に入浴した¹⁰。筋肉痛や打ち身に効くとされる、鉄分を多く含んだ茶褐色の温泉が有名である。露天風呂もあり、自然と一体化しているかのような温泉施設であった。

私たち以外に利用していたのは地元の方々が中心であり、地域住民の憩いの場であると感じた。室内の照明にはカメムシが集まっていた。地元の方に話を伺うと、カメムシは冬の間、寒さをしのぐために暖かい場所へ集まり、そのまま動かなくなるのだという。私たちにとっては少し衝撃的な光景であったが、地元の人々にとっては日常の一部であることを実感した。

また、施設には食堂も併設されており、そばを味わうことができた。そばは山都町を代表する名物であり、単なる観光資源ではなく、地元の人々にも親しまれている料理であることを再確認した。宿泊も可能な施設であった。

とてもいい温泉であったが、施設の老朽化に伴う建物及び設備の点検調査のため、2026(令和8)年2月2日より当面の間、休館することとなったとのお知らせが出たのは残念であった¹¹。このまま閉館となってしまうのを祈りたい。

¹⁰ 喜多方市役所ホームページ「山都温泉保養センター いいでのゆ」(以下のURL)に詳しい。
(<https://www.city.kitakata.fukushima.jp/soshiki/sangyo-y/32422.html>)

¹¹ 喜多方市ふるさと振興株式会社山都事務所「いいでとそばの里」「休館に関する重要なお知

4.3.6.夕食:福寿草会館

山都町のスーパーで購入した食料や、山都町で作られた米と味噌、さらに地域住民の方からいただいた野菜や米を使用し、夕食と朝食を調理した(写真 25)。特に味噌汁は、地元で採れた新鮮な大根を使ったため非常においしく、翌朝にはさらに味が染み込み、一層おいしく感じられた(写真 26)。

また、郷土料理の調理・試食で余り、持ち帰らせていただいた笹巻も夕食時にいただいた。保存食であることから、時間が経っても作りたてと変わらないおいしさであった。地元の方からいただいた赤飯も非常においしかった。

夜になり日が暮れると、気温はぐんと下がった。熊の出没が懸念されたため、外に出ることは控えた。朝になると霧が立ち込め、非常に印象的な光景が広がっていた。

写真 25. 夕食の支度している様子



写真 26. 夕食の様子



4.3.7 資源回収の手伝い

11月23日(日)は、朝から山都町近隣の企業や学校、福祉施設を訪問し、資源回収を行った(写真 27、28)。これらを通して得た資金は山都まちづくり協議会の活動資金となる。冬の間は気温が非常に低いため、カメムシが暖の取りやすい段ボールに集まり、密集していた。服ににおいが残るほど強烈なおおいだった。

福祉施設に訪問した際に、高橋さんが教えてくれたのは、その福祉施設が廃校を利用したものであるということであった。少子高齢化が進んでいる山都町を象徴するような建物だと感じ、非常に印象に残った。また、道の途中には後継者がおらず、潰れてしまった温泉もあり、生活に必要な建物のみが残っているように思った。朝の時間は気温がまだ低く、霧が

らせ」(<http://www.sobanosato.jp/spa/>)を参照。

かかっていて美しい光景を見ることができた。

写真 27. 資源物回収の様子①



写真 28. 資源物回収の様子②



4.3.8. そば打ち体験・試食: 館原会館

蕎麦資料館のナガシマさんのご指導の下、2人1組に分かれてそば打ちを行った。館原会館にはそば作りに必要な道具が一式そろっており、特にそばを切るための包丁は非常に高価で質の良いものを使用しているとおっしゃっていた。そばを作る前に道具を机の上に並べたが、こね鉢やのし板は非常に重く、おいしいそばを作るためには入念な準備と質の高い道具が必要であることを実感した。

準備が整うと、いよいよそば作りを始めた。まず、そば粉をこね鉢に入れ、水を加えながら1つの塊になるまでこねる作業を行った(写真 29)。ここでのポイントは、水を一度に入れず、少しずつ加えることでだまにならないようにすることであった。ナガシマさんからこね方を実演していただいたが、見様見真似ではなかなかうまくできず、長年の経験が必要であることを痛感した。昔は「そばを打てなければ嫁に行けない」と言われていたほど、そばは家庭で日常的に作られていたそうである。そのようなお話を伺いながら、生地が完成した。

その後、生地をのし板の上に移し、のし棒で薄く広げていった(写真 30)。この作業も非常に難しく、力を均等に加えなければ生地はきれいな円形に伸びなかった。続いて、生地を折り畳み、こま板とそば切り包丁を使って切る工程に入った(写真 31)。包丁をやや斜めにし、こま板を少しずつずらしながら切る作業を繰り返した。細く均一に切るのは想像以上に難しく、麺が太くなってしまった班も見受けられた。

切り終えた麺は茹で、山都町で採れたねぎとともにいただいた。打ち立て・茹でたてのそばはやわらかく、香り高く、非常においしかった。また、そば粉を水で練り上げた「そばが

き」もいただいた(写真 32)。作り方は比較的簡単で、鍋にそば粉と水を入れ、混ぜながら練り続け、固まったら完成である。味付けをせずそのまま食べたが、もちもちとした食感とそば本来の香りを存分に味わうことができた。さらに、食後にはそば湯もいただいた。寒い気候の中で温かいそば湯は体に染み渡り、心まで温まる思いがした。

今回のそば作り体験を通して、そばを打つことの大変さと、そのおいしさを改めて実感した。同時に、ナガシマさんとの会話や、地域の方々との交流を通して、山都町への理解をより深めることができたと感じている。今後、山都町の地域活性化を実現するうえで、そばは欠かせない存在である。この貴重な体験をより多くの人に知ってもらい、私たち自身がその魅力を伝える担い手になりたい。そして将来的には大学でもそば打ち体験を開催できればと考えるようになった。

写真 29. そば打ち体験①



写真 30. そば打ち体験②



写真 31. そば打ち体験③



写真 32. そばがき



4.3.9.空き家視察:木曽・広野行政区

11月23日(日)午後には、熊対策のため車内から木曽・広野行政区の空き家の視察を行った。山都そば伝承館(山都町沢田 3077-1)は、多くの人が集まっていたため賑わっていたが、そこから少し進んだ通りでは空き家が立ち並んでいた。一方で、木造の立派なつくりの家屋が多く、再利用の手段の模索が期待できる。

4.4.「大学生と集落の協働による地域活性化事業」活動報告会

2月11日(水・祝)にコラッセふくしま 多目的ホール(福島市三河南町 1-20)で行われた福島県「大学生と集落の協働による地域活性化事業」活動報告会に参加した。1年目7グループ、2年目は5グループ、伴走支援は4グループが参加した。その中で各大学3分ずつの時間で活動報告を行い、その後ポスターセッションと各グループに別れて交流会を行った。

山都町チームのプレゼンテーションとしては、2025年度に行った活動と、山都町の魅力紹介を中心に行った。一方で、山都町の令和10年問題に触れ、旧耶麻農業高等学校校舎の再活用構想案(育みの丘構想案)と、山都まちづくり協議会の新たな資金源の模索の重要性を訴えた。そして、地域おこしの3本柱として「育みの丘構想の実現」「山都そばの更なるPR」「山都まちづくり協議会の新たな資金源の模索」の3つを主張した。

ポスターセッションと意見交換会では、他の学生グループの経験や活動の話を伺うことができて、私たちのチームの今後の活動の参考となる良い機会であった。中でもSNS運用の方法については、各チーム悩んでいるトピックであり、その中でも宮城大学宮崎っ子の投稿は、見やすくわかりやすいレイアウトを用いており、参考になった。意見交換の中で、SNS運用のターゲットを誰に絞るかの有効性が問われた。山都町チームとしては、まずは山都町に住む若者に向け、地域の魅力を再発見し、山都町を「いつか帰ってきたくなる町」とするきっかけの1つになることを提唱した。SNS運用が軌道に乗れば、より外部向けの発信も行い、小規模から少しずつ拡大していく方針を示した。

活動報告会に参加したことで、山都町の今後の方針も見えてきた。この会に参加したことは、チームとして、町として、非常に有意義であったと思う。

5. 喜多方市山都町の抱える問題と課題

5.1. 実態調査が得られた問題点

山都町が抱える問題点は多々あり、人口の減少から直結する人手不足、空き家問題、医療機関の少なさ、雇用の減少などがある。また、山都そばの後継者問題や、熊被害、山都そばをはじめとする地域の名物の魅力発信が不十分であることも問題であると感じた。

さらに、2028(令和10)年は、山都町のターニングポイントとなる可能性がある。この年に

は新しく合併する中学校が開校し、旧耶麻農業高等学校校舎を再活用する、育みの丘構想がある。また山都まちづくり協議会の受けている助成金が 2028(令和 10)年度末で終了する。これらへの対応が喫緊の課題となる。

5.2. 取り組むべき課題

たくさんの問題が山積するが、私たちが次年度以降、取り組むべき課題としては、「育みの丘構想の実現」、「山都そばの更なる PR」、「山都まちづくり協議会の新たな資金源の模索」の 3 本の柱が重要と考えている。

育みの丘構想の実現：

2028(令和 10)年に新しく合併する中学校が開校する。育みの丘構想とは、人口減少によって廃校となった旧耶麻農業高等学校校舎を、新たに合併する中学校の校舎として再活用する構想である。中学校としての利用だけでなく、コワーキングスペースとしての活用や、子供も大人も楽しめる空間を提供することで、付加価値を見出し、地域おこしの中心的な場としていく。

山都そばの更なる PR：

既に福島県内では高い人気を誇っている山都そばだが、更なる知名度 UP のために活動を広げる。SNS を駆使した魅力発信や、山都そばの PR をサポートするための「そば茶ラテ」の開発、山都新そばまつりに、山都町の地酒や米、アスパラなど、山都町の名物を出店することによる規模の拡大を通じ、更なる PR を目指す。

山都まちづくり協議会の新たな資金源の模索

廃棄してしまうアスパラの根元を再利用した事業化の案がすでに挙げられている。また、大学生事業の観点を生かした獨協大学内での山都そばの出店や、地域ブランドをブラッシュアップしたプロダクトの通信販売、山都町に住む町民向けの代行サービスなどを考案し、山都まちづくり協議会の活動の財源を模索していく。

6. 次年度の活動計画案

今年度はじまった「大学生と集落の協働による地域活性化事業」は次年度は実証活動となり、3 年目は地域の方々が県のサポート事業(地方創生総合支援事業(過疎・中山間地域活性化枠)に申請・採択されるように伴走支援を行って、4 年目はサポート事業に採択されることが大学生事業継続の要件となっている。4 年目にサポート事業を採択されるためには、2 年目の実証活動をいかに充実させて成果を出していくかが求められる。2 年目の実証活動である程度の手応えを得ておかないと、3 年目の事業が厳しくなる。つまり、ここで提案する次年度の活動計画案がそれに影響してくると考えなければいけない。

次年度の活動方針としては、5.2 項の取り組むべき課題で述べた、3 本柱「育みの丘構想の実現」、「山都そばの更なる PR」、「山都まちづくり協議会の新たな資金源の模索」となるので、その活動方針に向けて活動計画案について話し合った。次年度以降の活動計画案とし

て、以下の7つの活動計画案を考えた。

山都町を、「いつか帰ってきたくなる町」にすることを目指し、子どもや若者向けの活動計画案もいくつか盛り込んでいる。一方で、ロードマップの作成は、今後の活動の軸となることが期待できるため、迅速な作成が求められる。山都まちづくり協議会との協議を重ね、協力合意書の作成を急ぎたい。また、特に重視する活動計画として、「山都町旅動画のアップロード」と「山都そば茶ラテの商品開発」を挙げる。映像を駆使した発信と、町の名物を活かしたモダンなドリンクの商品開発は、町に新しい風を吹かせると大きな期待をもてる。今後議論を重ね、実現を目指し進めていきたい。

今後は、次年度の事業が開始を待たずに、地域の方々とミーティングを行って、活動計画案をブラッシュアップしていきたいと考えている。

6.1. 山都町×獨協大学 協力合意書(地域活性化ロードマップ)の作成

まず、大学生事業としてあと2年間でサポート事業採択の成果を出さないといけないので、山都町と本学の間で「協力合意書(地域活性化ロードマップ)」なるものを作成し、これを掲げて目標をつねに意識して、活動を進めていきたい(図表11参照)。

図表 11. 提案① 山都町×獨協大学 協力合意書(地域活性化ロードマップ)の作成

企画の概要	山都まちづくり協議会と協力し、この「大学生と集落の協働による地域活性化事業」でわたしたちが達成する目標を書き出していき、一緒にまちづくりのビジョンを考える。
期待される効果	自分たちがやりたいこと、やるべきこと、できることを見える化することで、その先の行動をどのように進めていくかの決定をより明確にすることができる。また、達成できたこととできていないことが一目で分かることも利点である。
具体的な企画案	書き出した目標は冊子やポスターのようなものとして保存し、山都町の公共施設や獨協大学のキャンパス内に掲示することで、多くの人が目に触れられるようにする。
参考にした事例	群馬県地域おこし協力隊ツナグンマ (https://chiikiokoshi-gunma.jp/mentoring-2-3) 日本再起への12本の矢 (https://o-ishin.jp/coalition2025/)

6.2. 山都町の小中学校の児童・生徒とまちづくりを考える

2つ目は、山都町の小中学校を訪問し、児童・生徒と交流し、山都町のまちづくりについて一緒に考えていくプログラムを実施したい(図表12参照)。

図表 12. 提案② 山都町の小中学校の児童・生徒とまちづくりを考える

企画の概要	山都町の小中学校を訪問し、児童・生徒と交流したり、教員にお話を伺ったりすることで、教育現場の現状を学び、またまちづくりと一緒に考える機会とする。
期待される効果	子どもたちが自ら地域おこしを考えることで、町の魅力を再発見し、地元への愛着をもったり、地元の問題に関心をもったりすることが期待できる。
具体的な企画案	児童・生徒にどんな町にしたいかインタビューを行い、良いアイデアがあれば実現に向けて一緒に取り組む。「いつか帰ってきたくなる町」を目指し、課題解決の過程を「楽しむ」という特別な体験を提供する。
参考にした事例	宮城大学宮崎っ子 (https://www.instagram.com/38zaki_kko/)

6.3. 山都町の旅動画のアップロード

3 つ目は、山都町の地域資源を動画で撮影し、YouTube にアップすることで、外からの目線で町の魅力を発信していく提案である(図表 13 参照)。

図表 13. 提案③ 山都町の旅動画のアップロード

企画の概要	山都町には、日本百名山に数えられている飯豊山をはじめとする豊かな自然が存在する。一ノ戸橋梁もまた魅力的な観光資源である。それらの観光資源を撮影する。さらに、山都そばの食レポを撮影したり、地域住民のインタビュー動画も撮影。YouTube に山都町の旅動画をアップロードし、映像で町の魅力を発信する。
期待される効果	普段の Instagram にはいないような層の視聴者を獲得できる期待がある。また、インタビュー動画を撮影することによって地方創生という日本の問題に関心を抱く人々の注目を集めることができる。そのうえ、作成した動画の切り抜き動画をキャンパス内で編集することで、現地活動のない月も継続して山都町にかかわることができ、素材を自ら集めに行く必要もないため、大きな成果が期待できる。
具体的な企画案	町の中でインタビューを行い、町の問題点や魅力を詳しく聞き出す。また、町の名物である山都そばを実際に食べて食レポする動画や、一ノ戸橋梁や山都町の美しい自然の名所を訪れ、一般の観光客が訪れる目線でも撮影を行う。
参考にした事例	ReHacQ!旅 (https://youtu.be/qMR_6XOPwvY?si=Ab_SLoa9cwP8EXWj)

6.4. 山都そばを活かしたそば茶ラテの商品開発

4 つ目は、山都そばを活かしたそば茶ラテの商品開発を行い、山都そばの PR に役立てようという提案である(図表 14 参照)。

図表 14. 提案④ 山都そばを活かしたそば茶ラテの商品開発

企画の概要	山都そば PR の一環で、若者ウケを狙いドリンク「そば茶ラテ」の商品開発を行う。
期待される効果	京都の宇治市の宇治抹茶は、誰もが知る有名な抹茶である。最近では、人気カフェチェーンが「宇治抹茶ラテ」と称して若者を含む幅広い層からの人気を得ている。ここからヒントを得て、そば屋で出されることもある「そば茶」をラテにアレンジし、現代風の飲み物として知名度をあげ、山都そばを知るきっかけづくりに活かす。
具体的な企画案	山都町内で山都そばを提供しているお店と協力し、山都そば茶ラテを開発する。テイクアウトとして提供をするとゴミが増える懸念があるが、山都まちづくり協議会がごみを回収することで、協議会の資金源にもつながることが期待できる。開発に成功したら、キッチンカーや模擬店での販売も視野に入れ、また獨協大学内で、大学生をターゲットに販売することも検討する。
参考にした事例	宇治市観光協会ホームページ (https://www.kyoto-uji-kankou.or.jp/about-uji.html) タリーズコーヒー (https://www.tullys.co.jp/menu/drink/other_d/gt_latte.html)

6.5. アスパラの廃棄部分の活用方法の考案

5 つ目は、山都町で特産品であるアスパラガスの廃棄部分に注目し、それを再活用する方法を考えていく提案である(図表 15 参照)。

図表 15. 提案⑤ アスパラの廃棄部分の活用方法の考案

企画の概要	アスパラガスは出荷時に、根元の部分を切って廃棄してしまうので所品ロスが発生している。その廃棄される部分を再活用する。
期待される効果	普段は廃棄される部分のため、安く仕入れることが可能。それを再活用する手段を見出すことができれば、山都まちづくり協議会の新しい資金源として期待ができる。また、食品ロスを減らすことで環境問題にも貢献できる。
具体的な企画案	スープのだしとして活用する方法や、加工して新しい使い方とする方法などを期待しているが、より詳細な部分は今後有識者を集めて検討していきたい。
参考にした事例	はてなスッキリ (https://www.shend-trend.com/post-12187/)

6.6. 子どもオーナー本屋さんの設置

6 つ目は、本箱を設置して、そこに子どもが本をサブスクで貸し出す仕組みを作る提案である(図表 16 参照)。

図表 16. 提案⑥ 子どもオーナー本屋さんの設置

企画の概要	子どもがオーナーとなり、お勧めの本をセレクトした棚を設置する。
期待される効果	子どもが読みたい本を、自分たちで本棚に設置することで、保護者や町の人が子どもたちの関心をもつものを知るきっかけになる。また、大人にはサブスクリプションサービスとして本棚の貸し出しを行い、自分が読んでほしい本を広めたり、自身が書いた本などを紹介したりする場として提供する。
具体的な企画案	山都まちづくり協議会を中心に、地元の木材を使って本棚をつくる。設置場所は育みの丘や図書館、公共の場などを想定している。サブスクリプションとして本棚を貸し出すため、毎月の収入を見込める。
参考にした事例	ぶらっと book (https://note.com/prattobook/n/n3553e89c3b2f)

6.7. 旧耶麻農業高等学校校舎の視察

最後は、旧耶麻農業高等学校校舎の再利用についてのアイデア出しのために、校舎の視察を行う提案である(図表 17 参照)。

図表 17. 提案⑦ 旧耶麻農業高等学校校舎の視察

企画の概要	旧耶麻農業高等学校校舎を実際に視察し、実態を知ったうえで、校舎の再活用について意見交換を行うワークショップを実施する。
期待される効果	統合し新しい中学校の校舎として再活用予定の校舎に実際に入り、何ができるか、使えるかを調査することで、今まで気づかなかった点に気づくかもしれないという期待ができる。
具体的な企画案	山都まちづくり協議会と協働して、校舎内を視察する。もともと農業高校の校舎のため、使える専門的な設備についても説明を受ける。
参考にした事例	国土交通省 みんなの廃校プロジェクト (https://www.mlit.go.jp/smcn/info/pdf/event/250221/03-1.pdf)

7. おわりに

今年度は、活動 1 年目ということで 2 回計 4 日間にわたる現地活動を経て、地域が抱える課題や現状を把握した。特に問題視したことは、町の高い高齢化率と人口の減少である。これは、本事業に手を上げるような過疎地の集落であれば、どこでも共通する課題であると思うが、山都町でも例外ではなく人口問題は深刻である。特に、町が最も力を入れている山都そばの後継者不足は、日本にとって大きな問題となり得る。それらを踏まえて次年度からはより踏み込んだ活動を行っていく。

ここまで述べてきた通り、「育みの丘構想の実現」「山都そばの更なる PR」「山都まちづくり協議会の新たな資金源の模索」と、この 3 本の柱を最優先とし、実現する戦略を考えていく。私たちの今後の活動のためには、山都まちづくり協議会ならびに山都町の方々のご協力

が必要不可欠である。今後も町と連携を深め、協議を重ねていく所存である。引き続き次年度も、山都町の魅力の深堀に尽力し、獨協大学が山都町のアクセル役として、山都町を前に進め、山都町の皆様の生活に彩りを添えられるよう努めていきたい。

謝辞

今年度は、私ども獨協大学地域活性化プロジェクトをマッチングで選んでくださり、2度の現地活動を受け入れていただきました。山都まちづくり協議会の皆様には小澤清一会長をはじめ、会員の皆様に現地活動を支援していただきました。喜多方市集落支援員の高橋薫様には、JR 磐梯町駅までの送迎をはじめ、私たちの現地活動を全面的にサポートいただきまして、無事2回の現地活動を行うことができました。NPO 法人福島県有機農業ネットワーク理事長の浅見彰宏様には就農者等へのヒアリングに連れて行っていただきました。郷土料理の調理・試食の際には、喜多方市食生活改善推進員の宮城悠子様にはやさしくご指導いただきました。喜多方市企画政策部地域振興課きたかたぐらし推進室の遠藤裕二様にもつねに現地活動にご配慮をいただきました。地域の皆様に温かく私たちを受け入れてくださり、町内の案内から企画立案まで、多くの活動を行うことができました。心よりより御礼を申し上げます。

福島県地域振興課からは1回目の現地活動には星周明様が、2回目の現地活動には十二所謙課長が同行してくださいました。福島県地域振興課の担当者の皆様には本当にお世話になりました。さらに、社会システム株式会社の皆様をはじめとし、本事業に関わったすべての方々に対しまして、この場をお借りして御礼を申し上げます。

JR 磐梯町駅での集合写真

